

立科町テレワーク推進会議 議事録

1 会議概要

日 時 平成 29 年 10 月 26 日 (木) 午後 1 時から
場 所 立科町ふるさと交流館芦田宿
出席者 別添一覧表のとおり

2 あいさつ (米村町長)

皆さんこんにちは。生活様式の多様化という中で、テレワークという新しい働き方が、近年、新聞紙面でもよく取り上げられる時代になって来たと思っています。新たな働き方の時代が大変注目をされてきていると考えています。

この町においてもこの事業を通して、新たな働き方、雇用になることによって、この町に住んでみたい、長く住みながらどういう生活を自分たちが営んでいくことができるかというような一つの問題提起をしていきたいと思っています。この町に帰ってきて、今まで自分たちがキャリアを積んできたものをどうやって生かせるのかということは、お母さん方、また若い人達にも悩みがあるということ、少しずつ町だけでなく長野県の佐久地域、また東信地域でも問題が提起できるような活動をしていきたいという中で、今動き始めていると考えています。

今働いてはいるけれども、所得がだいたい 300 万だとか 400 万だとかそういう中で子育てをしながら共働きをして生活をしている人たち、また結婚を機に旦那さんも奥さんもそうですが、そういうキャリアを都会ではなく田舎に来て、技術を発揮できないかということも悩みがあるというような形で考えているわけです。そういう中で、「雇用創出型」また「企業進出型」という形の中で進めている。また、社会福祉型ということも新たにチャレンジをしていきたい。やはり働く場所を作っていく、こういう町だからこそ地域だからこそ、都会とは違う中での雇用が創出できないかということに挑戦していきたいと思っています。

事業の進捗業況や、今後の予定・課題について事務局から説明をしてもらおう予定です。こうやってみなさんにお集まりいただいていますので、些細なことでも良いので、ご意見やご助言をいただきたい。この会議の後には、ネットワンシステムズ株式会社の尾形様、沖電気工業株式会社の松山様、塩尻市の小澤様にも講師をお願いし、「地方が生き残るためのテレワークセミナー」を開催する。こちらも大変楽しみにしているところです。どうぞよろしくお願い致します。

町のあらゆる人たちが、町のいたるところで、自分たちの状況に併せた働き方が出来る「社会福祉型テレワーク」の実現に向けて、みなさんと連携を深めていきたいと思っています。本日は、活発な意見をしながらこの町だけではなく、これからの日本の在り方も踏まえた中で、お話を深めていき、この町のテレワーク事業が成功することが一つの投げかけになることを願って、開催にあたってのあいさつとさせていただきます。

(司会：遠山課長)

それでは議事に入りたいと思いますが、進行につきましては副町長にお願いしたいと思います。

(山浦副町長)

皆さんこんにちは。本日は何かとお忙しい所、第 3 回テレワーク推進会議ということでお集まりいただきありがとうございます。また、当町のテレワーク推進事業につきましては皆様方にお力添えを

頂いておりますこと重ねて感謝を申し上げます。本日は現在進めている事業について、その進捗と今後の取組などについて担当の方から説明をさせていただきます。ご助言等頂ければと思いますので何卒宜しくお願い致します。尚、この会議の進行につきましても円滑な議事進行に努めたいと思いますので皆様のご協力をよろしくお願い致します。それでは議事に移らせていただきます。まず、企業進出型テレワークの進捗状況と今後の取組について事務局から説明をお願いします。

3 会議事項

(1) 企業進出型テレワークの進捗状況と今後の取組について

※事務局から資料1の説明し、その後出席者から発言

(高畑氏)

開発合宿に来られた企業とかはその期間無料とかそういうメリットを見られて自分たちで探してこられたのだと思うのですが、実際ハッカソンって仕掛けが結構ありますので、どういう風にハッカソンをここに来てやってもらうとかそれをアピールされるのかなとそこがあまり見えない。たぶん、どこでもそうなのですがハッカソンをやるとなったらある程度自治体で、泊りがけでやるっていうのが基本的にはあるので、何日間に渡ってとなると、どうしても借りの費用を安く上げなければならない。あと人に来ていただかないといけない。ハッカソンの結果を企業がスポンサーの場合はいいが、自分たちの企業のサービスをハッカソンで出してもらうというのであれば、企業はスポンサーがつくのだが、大体やられているのは自治体。その仕掛けをどうしていくのですか。我々企業側からしてみれば、開発合宿っていうもので、期間限定でいくらっていうのであればまだ検討できるかなみたいなどころは若干ある。

(事務局)

社内の解決しなければいけない課題とか、新しいサービスコンテンツを3日間、4日間の中で徹底的にいろんな部署から集まったメンバーがやる。ハッカソン主体のものがあるのは承知しているのですが。そうなると言葉の使い方がいけなかったかなと思うのですが。

(高畑氏)

開発合宿とか企画会議みたいなもののほうがわかりやすいかもしれないですね。企業も自社のサービスを出してこれを何とかサービス化にできないかみたいなものでオープンにする。そういうところであればスポンサー付きでしやすいんですけどね。

(事務局)

イメージしていたのは企画会議ですね。

(高畑氏)

どちらかというとならハッカソンはアイデアソンのようなものですね。

(事務局)

ハッカソンの言葉の使われ方は？

(高畑様)

ハッカー自体がIT用語なのでハックするのとマラソンを掛けているのでハッカソンというとなら開発しちゃう。アイデアソンであればディスカッションという。

(事務局)

あくまでも言ってしまうと場所貸しという話。場所を探している時にうまく提供できればという

ころです。

(松山氏)

あと、今結構やっているのがオープンデータで、地域ごとにやっているの。

(高畑様)

問題・課題とかの解決で自治会さんがベースで、アイデアソンみたいな形で。

(松山氏)

自治体さんがデータを提供して、地域の方でみんなが集まって管理データ活用法とか出てきています。そういうのが多いですね。

(高畑氏)

IOTを企業がどう使うとか、大企業でなくて個人事業主での製造業をどう使っていくかというようなこともアイデアとしてあげられる。

(松山氏)

質問だが、安井さんとワーカーさんの雇用契約が11月1日から出来たことがすごくいいなと思ったのですが、これは勝手にではないですけど場を提供しただけで、本人同士が話して決められた感じなのですか。

(事務局)

もちろん、調整はさせていただきましたが、あくまでも個人間での契約という形にはしてします。契約書類とかは商工会の渡邊さんの方にもご助言いただきましたが。

(松山氏)

やっぱり個人間での契約なのですね。

(事務局)

そうです。今、スマホアプリを安井さんが開発されていて、そのアプリの利用ユーザーを増やしたいという段階に安井さんがいらっしゃって。ただ安井さんはプログラマーとかエンジニアなのでそこまで手が回らないというので、ツイッターを使っての広報をワーカーさんにお願ひしました。ワーカーさんも勉強しながらやりますというレベルではありますが。

(松山氏)

ワーカー候補は今回も何人かいらっしゃるわけですか。候補の中の持っているスキルとかどんなソフトが使えるとどんなプログラムが出来るといふような。そういうのを一覧にして示しているものがあれば外から来てくださる事業者の方にこういうものがありますよって提示する条件の一つとして使えるのかなと思います。

(事務局)

その話はあとの資料2のところ。まだそこまでリストカード出来ていないのですが、これからしていく予定ではあります。

(松山氏)

立科町としての課題解決を目指して、オープンデータ化できるものはないのですか。

いろんな町のデータは自治体として提供しますので、これで何か作ってみてみたいことをみんなでやるようなイメージがある。それがもし立科町として例えば土木系のデータであったとしてもその何か開放できるものがあればうまくそれをやってみて、イベントを興して行ってそこに来てくれる人を宿泊させるだとか町としてのデータをハッカソンで揉んでもらって、いいサービス・仕組みを作っていくま

すっていうのであれば流れとしては綺麗なという気がするのですが。

(高畑氏)

データの意味は逆に考えなくていいですよ。こういうデータがあるっていうのを出していたのが実際の仕事であって、今言われたみたいにこうやったらこんなことができるよっていうのをアイデアソンが考えるので、あんまりこれに何の価値があるんだろうと思いついて出してもらって、でも意外な結果が出るっていうのがアイデアソンなので。

(米村町長)

自分たち行政がこういう風にしたいじゃなくて、今行政はこういうことをやっているということオープンにして、それに対して、これはこういう風にすればいいんじゃないかというアイデアを出していただくという形。

(松山氏)

各地で新しくアプリ化して実際にみんな使ってもらうことはいっぱいあるので、その立科町版だとか、どういう風にしていけばいいのかなとか、他に組合せたら楽しいアプリ出来るかなみたいなことを揉んでみると。これこそ塩尻なんか一生懸命にやっているのだから論議していくと道はあるのではと思う。

(尾形氏)

立科らしいこと、建設業に役立つ広告ページの使い方とか樹木とかそういったことに役立つデータの使い方とか、それをみんなで考えようみたいなものにする、それは立科町さんに役に立つ話に繋がっていくかもしれない。オープンデータで出せるデータをまず整理することが必要になる。それは面白い取り組みのやり方だと思う。オープンデータ化っていうのは全体的な流れなので、それはやっていかないといけない課題だと思いますけど。

(山浦副町長)

大きな市とか町とかで、何々町の統計とかって例えば人口から始まって、あと産業とかいろいろ。ひよっとするとホームページなんかで公開しているかもしれないけど、そんなイメージなのですか。

(高畑氏)

具体的に例を挙げると、例えば地形のデータがあると、そしたら海拔のデータが全部情報としてあります。この季節の雨量とかお天気の情報、気象庁からの。人口の分布図とかあります。実際今回みたいに水害があった時にここまで水が来たらどれだけ浸かるのっていうのはすぐに地図で表せるんですね。だからアプリを使って自分はどこに行けばいいってわかるんですね。そういうことをやられている自治体は沢山あります。要はそれぞれデータで、地図データもあるし、気象データもあるし、人口のデータもあるんです。それをオープンデータにしていけばいい、使えるということなんです。データにどんな意味があるかとかはあんまり考えていただかなくていいというのはそのことなんです。絶対あるんです。土地のデータ、地形のデータとか絶対ありますし。言ったらグーグルマップの方がオープンデータと言えるくらいなんですけど、あんまり使っていると有料化されるので。国ならまず持っているんです。

(米村町長)

そんな発想持っていないよね。だから結局今でも町民に関わるデータにしたって、いま全部データ管理を委託している。システム化してね。それは事務局とちゃんと話をしてオープンにしていきながらいろいろネタと組み合わせていながら、何かアプリを作っていくみたいな形になっていくことだよ。

(高畑氏)

個人情報とかも守るべきだけど、ビックデータになった場合、例えば年齢と性別とか、ここはよく交通事故が起こるけどどういう時間帯に起こっているとか、どういう年代が起こっているだとか、車と車が多いのかとか、蓄積していっただけであとはそれをシステム化することによって人間が気付かないアルゴリズムがわかってきます。そういう所でいろんなアイデアが生まれてきますので。データをセンターでとってどんどん作ることなんです。それをどう解析してどう使うのかいろんなデータを見つけながら時間を合わせて三次元を含めて連携することによって色々なサービスが生まれてきます。

(米村町長)

それがハッカソンの。その辺自体理解していないとダメだよな。

(事務局)

勉強不足で申し訳ないのですが、自治体がハッカソンを実施したときに参加される方は、探される方のメリットは何を求めているのでしょうか。

(高畑氏)

二通りありまして、ボランティアの気持ちがある人が多いです。というのは、大手の企業にいらっしやってずっと IT で来られた方は、ちょっと窓際族になっているのか、早期退職される傾向がありますので、そういう方たちが結構ボランティアで再就職はされているのですが、以前ほどそんなというので、参加されたりするケースが多い。今 IT は海外からのいろんな影響を受けているのですが、Code for Japan と言って、地域のためにコードを書くというコミュニティーがあります。自分たちの身近なものを IT で解決しようというコーダーの集まりです。そういう人たちが長野に Code for Nagano とか立科とかあるか存じ上げませんが、いろんな自治体、もっと小さなコミュニティーのレベルで。そういう人たちはビックデータ提供するからみんなで合宿してアイデアソンしない？とか言って集まってもらいます。

(事務局)

規模はどれくらい？個人？

(高畑氏)

個人です。基本的には地元の方が地元のためにと集まってくるので、これが一番本当は町興しというか IT で何かしようとするときには一番強くて。そこから大きなことをしようと思うとお金があるので、スポンサーという企業みたいな支援して頂ける企業に入ってもらったりとか。自治体が交付金もらってちょっとお手伝いするとかしながら一緒にやられるケースが多いです。基本的にボランティアなので別団体を立ち上げるとかそういうことが多いです。

(尾形氏)

テレワークの論議の中で言葉の綾なもので、とりあえず話に戻していくのは必要なと思うのですが、アイデアハッカソンみたいなことはもう一度論議しながら別口で考えた方が良いのかなと思う。

(渡邊氏)

ビジネス合宿というとらえ方で、「ビジネス合宿」で今検索しても旅館や企業が出しているものしかなくて自治体が宿泊施設を斡旋しているものはない。いきなりテレワークのワーカーの方々にアイデアソン企画してくれというのは無理なので、そのビジネス合宿を斡旋する為のポータルサイトみたいなものを作るという発注するものでは。

(高畑氏)

企業合宿だったらすごく魅力的だと思います。

(米村町長)

ネーミングを間違ったな。

(事務局)

理解が足りなくて。

(米村町長)

でも、そのおかげでそういうものだったと理解できたということは自治体にしても、これから必要じゃないのかと。自治体データというものはどうしても個人情報だと縛られていて出てこないところが多い。そういうところで面白い。また新たな考え方として考えるべき。

(松山氏)

テレワーク、サテライトオフィスを求めてというのはどうしても一時的な話だし、まずは名前を売っていくためには、アイデアハッカソンみたいなことをやるような人たちを引っ張ってくるとか、メンターとかサブリーダーみたいな人たちを呼んできてやりましょうよっていうのを、声かけてイベント興せみたいなことを言えば可能性はあります。それで立科は面白いなとなってくると、コワーキングでもいいよねという感じになってくる。実際開発するアシスタントさんとかこないだ来てくれた三人組なんかもそういう世界の人だと思いますので、あの辺の人に向けたイメージ作りも大切かなと思います。

(蒔田氏)

さらに言うと、今のこの資料では既存の宿泊施設が前提になっていますが、立科町は企業の使っていない合宿施設とかいっぱいありますよね。山の方に。そういうものをスペースマーケットなんかに登録して、空いている会議室とかを使いたい人とマッチングするというサービスなんですけど、そこに登録するとかして。その窓口が立科町になって、ハッカソンをそこに呼んでやってもらうという形にすれば、さっきおっしゃっていた町との接点という意味でも解決されるかなと思います。やはり言葉ですので、そういう新しいもの使っているってだけで町のアピールになると思います。

(山浦副町長)

いろいろとありがとうございます。この後充実したセミナーがありますので(1)については以上とさせていただきます。それでは(2)の雇用創出型テレワークの進捗状況と今後の取組について事務局から説明をお願いします。

(2) 雇用創出型テレワークの進捗状況と今後の取組について

※事務局から資料2の説明し、その後出席者から発言

(松山氏)

ちょっと少ないというのが印象です。多分規模から考えても、ちょっと働いてみようかなという主婦はもっとたくさんいると思うのですが、そういった人たちをどうやって発掘するか。ワーカーに少し話を聞いたときに、別に働かなくてもいいみたいな姿勢なのかなという話も多少ありました。働いてみると面白いみたいなことを町内の主婦層に対してうまく広げて、拾う方法はないかなと。楽しい雰囲気をうまく伝えていくことが出来れば。なんかちょっと働いてみようかなっていう。

(米村町長)

この来ている人たちは、毎回同じ顔触れになってきていること？新たな人たち？

(事務局)

12, 13, 14 番の方は、セミナーに参加した人が声かけてくれて来てくれた方。徐々にロコミで来ている感じがします。

(米村町長)

こっちから新たな呼びかけはしていない？

(事務局)

していません。

(米村町長)

僕が介護の仕事をしていた時に、どうしてもコミュニティーが出来てしまうとそこに他が入りづらい。だからこのこれはこの人たちのものだってなると他が入れなくなって、それは作ってはいけないと思っている。何回かセミナーをやっているけど、結局それが固定化すると、他が入りづらくなってしまふ。自分たちは遅れて入ってくるからこそ、その一歩が踏み出せなくなるということにならないように配慮が必要かなと思う。ただ、どこかでエンジンとなる人がいないといけないから、そこで進めていくのはいいことだと思う。だから新たにどんどん次に次にという形のこの人たちは1期生だったら、次1, 5期生だとか。そういう風な戦略も必要なのではないかと思っている。現状よくわからないけど、今どういう風な形になっているのかなという所が。どうしてもアンケートを見ても、初心者みたいな形でまたここから進めていくという形だから、それも必要だけどもある程度のところの区切りって、まだ1年たっていないが。

(松山氏)

これからのことだと思うのですが、やっぱり保育園のママさんとか小中学校のイベントに参加されているPTAの方々とか、たくさんいると思うので、子育てでつながっているところに広げていければと思います。

(事務局)

実は今回セミナーの広告、ポスターをすごくいいものを作ってもらって、町内回覧した。とあるママさんから、逆にポスターが良くて目についたから言わせてねと言って来たのですが、その方元々、大手の広告出版業をやられていた方なのですが、テレワークという言葉がやっぱりどうしても全然知らないから、初めは使わずに出した方が良くってことをすごく言われました。もっと短い時間でこれだけ稼げるとか。その通りだなと。ただそういったアンテナの高いママさんには情報は届いてはいると。アンテナ高い人はもちろんこれでいいけれども、そうじゃない人に届くメッセージを書きなさいと言われました。確かに、そういう所もあるなと思います。

(尾形氏)

ミーティングに1回参加させてもらって、来たお母さん方とお話しさせてもらいましたが、結構時間を分けても来ていただけましたよね。興味あるってことはわかったという話と、やっぱり、閑散期この地域はやるのがないから、アルバイトとかやりたいと。すごく安い内職をやっている、それをこういうテレワークみたいなことで稼げるなら是非やりたいと。体験兼ねてPC業務をやったことで、そこで初めてパソコンさえ使うことがちょっとダメだってことが分かった。だからその積み重ねがすごく大切で、それでPC教室までできているじゃないですか。これは確実に進んでいるなと思っています。ただ、先程の広げ方のところで、なかなかここまで来る時間という制約があるから、どういう風に広げるかということと、それを継続的に広げていくということをちょっと工夫していく。実際これで、パソコンの勉強が出来るんですか！とすごい喜んでいたじゃないですか。自分たちのスキルをアップできる、

今度絶対来ますよとのお母さん言ってくれたので、なんかあそこに行くとな新しいパソコン触れて、勉強できるみたいなことが口コミで広がっていけば集まる可能性があるかなと思います。核になる人を中心に成功事例を広げていく、アピールしていく。さきほどのポスターは長野の信越総通でも見たのですよ。広がっているんですよ。ちゃんと。これはこれですごく正解なことだし、目に触れていることが多くなってきているような気がします。なので、この冬が結構ポイントでテレワークという前提がパソコンが使えるということなので、まずは冬を通してできれば、次のステージに行けると思う。ここはすごくいいと思います。うまく皆さんに来てもらう、町の支援で勉強できますみたいな伝え方というかそういうのをやられると良いと思います。

(松山氏)

そもそもママさんに限定しているのですか。

(事務局)

入口はそうだったというだけです。

(松山氏)

テレワークを推進するというと、高齢者、大学生だけでなく、もしかしたら中高生のバイト感覚でやりたいという人がいるかもしれない。中高生の方が IT スキルが高いかもしれないですけど、あとテレワークは時間を自由にいつでもできるというのが、もしかしたら土日にもちょっとやりたいという人もいないかもしれないし、最初はあまり限定する必要はないと思います。

(山浦副町長)

よろしいですか。それでは次の(3)の地方創生推進交付金について事務局から説明をお願いします。

(3) 地方創生推進交付金について

※事務局から資料3の説明し、その後出席者から発言

(蒔田氏)

ワーカーの方はだいたい期間的にはどのくらい働きたいという希望をお持ちなのでしょうか。閑散期をメインに働いてそのあとは次の閑散期にまた仕事があれば働きたいかというようなレベルなのか、それとも自分のスキルがきちんと身につけてできそうであれば継続的に働いていたいというような思いなのか、どういった方が割合として多いのか、もしわかっていれば教えてください。

(事務局)

もちろんそれぞれの状況があると思うのですが、聞いたところ農家さんの奥さん達は全く冬場はできるけれども、4月以降は全くダメですとかいうようなかたはいらっしゃいます。週に2、3だったらいいよというような方も中にはいらっしゃいます。季節関係なく。それはリスト化する中で整理をしたいと思います。

(蒔田氏)

意向としてはどちらのタイプのワーカーさんにも働いてもらおうとは考えているイメージですか。

(事務局)

たぶんその時にどういった仕事があるかというところにもよりますが、実際その具体的な仕事の振り方とかワーカーさんのチーム作りとかになってくると思うので、そこまで煮詰めることができていない状態です。

(渡邊氏)

私個人でも、せっかくワーカーさんが仕事を覚えてざっとでもできたとしても、その方がライフイベントとかで辞められてしまうとまた別の方を再任してその方にまた一から教えなければいけないとなってしまうと結構大変だよねという話を聞くことがあります。そのあたりのフォロー体制というかそういうのも、もしかして考えていくといいかもしれないですね。また振り出しに戻ってしまうと結構苦労されたりするので。もうちょっと仕事の内容ですとか、全体で仕事をくださる方がもうちょっと発展してきたら今後相談して行ければなと思います。

(松山氏)

障がい者雇用の関係で言われたことがあるのですが、基本的に中間でマネジメントみたいなものがあった方がいいのではと言われました。これは障がい者雇用だけでなく一般の企業でも短い期間働くとか、短い時間働くとかになると、そこら辺の所を共通意識というか目標というかそういったところのマネジメントみたいなものを専門といたらおかしいのですが行政側との中間、或いは企業側との中間でできる人が良いと思うのですが。

(尾形氏)

今日私がお話しさせていただくのはそこでして、塩尻市振興公社は半官半民みたいな組織が中心になってテレワークをやっています。今言われたとおりに、そこにマネジメントをやっている女性の方がいまして、ワーカーさんをしっかり面倒を見ているので塩尻市の場合もうまくいっている。というような話を今日はさせていただこうと思います。

(松山氏)

たぶん必ずそういう人がいないとできないですね。それと今後高齢者とか障がい者もそうですけど、フルタイムというわけにはいかないの、私は農業兼業でやりたいから1日3時間だとかそういうところでいろいろ引き出していないと、全体の構造として同じだと思います。その人たちの希望と仕事と、勤怠管理はそれは何かしら組織が必ず必要。それは人でもあり公社でも組織の中の人なのかもしれませんし、それを企業がやってもいいと思いますが、マネジメントしていかないと。やっぱり働きたい人の気持ちをちゃんと聞いてあげないと、優しくしてくれる人がいないと絶対回れませんから。

(山浦副町長)

今回アイデアいただきましたので、練りながら進めさせていただきたいと思いますので、またご協力を賜ります。それでは(3)の方は以上にさせていただきまして(4)の今後の事業スケジュールについて事務局から説明をお願いします。

(4) 今後の事業スケジュールについて

※事務局から資料4の説明し、その後出席者から発言

(山浦副町長)

事業スケジュールということで説明がありました。確認を頂いて何か特別確認しておきたいという点があれば話していただければと思いますが。先程、事務局からお話ししましたように全体での会議もありますけど、メール等で図りながら進めさせていただければと思います。なんとか充実させたい部分がありますけど、皆さんの力添えを頂きながら進めてまいりたいと思いますのでご協力いただければと思いますよろしくをお願いします。

(尾形氏)

ウェブ会議とかです。小澤さんとかみんな9人が集まるのは大変なのでビデオ会議を使ったものでもし可能であればセキュリティーポリシーの問題だとかあるのであれなんですけど、そうすれば会議すんなりできるかなと思いますので、もしその辺。

(山浦副町長)

それでは(5)のその他ですが、これまでの議論を踏まえてでもいいのですし、今回の議題に上がっていないようなことでも構いませんので、何かあれば。

(5) その他

(高畑氏)

最終的にはどういう形を目標とされているのですか。

(事務局)

まだ言葉でしかないわけですが、グランドデザインの方に記載をさせていただいております、資料3の所の目指す将来像のところに簡単には書いてありますけれども、行政がやるテレワーク事業なので、民間とは違うことを今は考えています。立科町は里地域と高原地域大きく特性が違うところがあります。里山の自然豊かな所、湖、高原そういったところのいろんな特徴を活かして働いていただけるようなことを考えています。あらゆる人たちがいたるところで社会参加を果たしていく環境を作りたいという所が今の目標です。それを表した言葉として社会福祉型テレワークという言い方をしています。

(高畑氏)

仕事自体はやっぱり企業から持ってきていたいと思われていますか。

(事務局)

そうです。決して首都圏だけとは考えていなくて、県隣の市町村の事業者さんに社会的な意義があるのですよということを理解いただいた上で、ちょっとずつ仕事をやっていくと考えています。

(高畑氏)

今も新サービスとして取り組んでほしいので。

(山浦副町長)

ありがとうございました。最後駆け足になってしまって申し訳ございませんでした。以上をもちまして本日の協議を終了させていただきます。ありがとうございました。

○資料

- 1-1 企業進出テレワークと進捗状況と今後の取組
- 1-2 新聞記事
- 1-3 プレスリリース
- 2-1 雇用創出型テレワークの進捗状況
- 2-2 ママさん名簿会議用
- 2-3 セミナーアンケート結果
- 3 平成29年度 地方創生推進交付金
- 4 今後の事業スケジュール案